

JICA パナマ 中米カリブ諸国第三国研修等への出張報告レポート

2023 年 10 月 14 日

長崎大学病院 感染制御教育センター 田中健之

【はじめに】

昨年までのパナマ国ゴルガス研究所への JICA パナマの感染症対策能力強化支援「パナマにおける COVID 19 他新興感染症に係るサーベイランス及び検査能力向上プロジェクト」の一環で、昨年 9 月に JICA パナマの招待でゴルガス記念研究所、サントトマス病院の視察を現地スタッフとの意見交換、およびゴルガス研究所研究員スタッフ・サントトマス病院医療関係者を対象に新型コロナ対策の講演を行った（別途昨年の報告書参照）。同支援プロジェクトの期間が終了し、現在、その支援のフォローアップ期間となっており、今年より新しい支援プロジェクトとして、ゲノムサーベイランスの中米カリブ諸国への技術支援の一環としてのプログラムとして、第三国研修プログラムが開始された。本プログラムの具体的な概要としては、中米・カリブ諸国の検査技術向上のため、各国から検査技師をパナマのゴルガス研究所に招待して、実地研修 1 週間・座学研修 1 週間のプログラムで構成されている。もともとゴルガス研究所の検査技術が非常に高く、同プログラム導入前から独自に中米各国への技術支援の対応をされていた背景もあり、JICA 支援プログラムでその内容をより強化するという双方も目的が合致した中で開始となった。第 1 回目は 2023 年 2 月 27 日から 3 月 10 日にキューバ、ドミニカ共和国、コスタリカからの検査技師 3 名が招聘され研修が行われ、今回第二回目がより参加者を広げて 2023 年 10 月 2 日から 10 月 20 日までキューバ、コスタリカ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグアからの検査技師 6 名が参加し開催された。今回、その第二回目研修の座学のプログラムの中に、human AMR (RAM humana) と One Health (Una Salud) という 2 つのテーマでの講演の依頼を受け、渡航した。それとは別にパナマの東側国境地帯からの不法移民の入国地帯（ダリエン県）でゴルガス研究所が感染症発生地域として検査診断・診療支援を行っている箇所へのサイトビジットもリクエストして視察を行った。

【ビジットスケジュール】

MISSION SCHEDULE (Dr. Tanaka)									
Date	Time	Contents	Topics	Place	Transport	Kanagawa	Naito	Javier	Kuno
2023/10/8	Sun	11:15 Dept. from Nagasaki Airport	transfer at Haneda Airport and Washington Airport						
10/9	Mon	6:21 Arr. Tocumen Int'l Airport UA7065(Copa)		Tocumen Int'l Airport	Jose Hidalgo				
		8:30 Arr. Hotel	Early check in at any time enabled	Marinnplace Hotel					
		12:45 Dept. from Hotel		Marinnplace Hotel	Driver Rolando		•		
		13:00 Meeting with JICA	with Kanagawa (Chief Representative)	JICA Office		•	•		
		14:30 Courtesy call	Ambassador Fukushima	Embassy of Japan	Driver Rolando	•	•		
10/10	Tue	8:30 Dept. from Hotel		Marinnplace Hotel	Driver Rolando		•	•	•
		9:00 Courtesy call	Dr. Pascal	Gorgas Institute			•	•	•
		10:00 Site visit	Laboratory	Gorgas Institute			•	•	•
		13:00 Lecture 1	AMR Human Health	Gorgas Institute		•	•	•	•
10/11	Wed	5:20 Dept. from Hotel		Marinnplace Hotel	Driver Pedro	•	•	•	•
		9:30 Site visit	Laboratory, Immigrants station	Meteli		•	•	•	•
		14:00 Dept. from Meteli		Meteli	Driver Pedro	•	•	•	•
		18:00 Arr. Hotel		Marinnplace Hotel			•	•	•
10/12	Thu	9:45 Dept. from Hotel	Check out	Marinnplace Hotel	Driver Rolando		•	•	•
		10:00 Meeting with JICA	with Naito and Kuno (future cooperation)	JICA Office		•	•	•	•
		12:30 Dept. from JICA		JICA Office	Driver Rolando	•	•	•	•
		13:00 Lecture 2	AMR One Health	Gorgas Institute	Driver Rolando	•	•	•	•
		16:00 Leave for Tocumen Int'l Airport		Marinnplace Hotel	Driver Rolando				
		16:30 Arr. Tocumen Int'l Airport							
		18:48 Dept. from Panamá UA7172(Copa)							
10/13	Fri		transfer at Washington Airport						
10/14	Sat	20:35 Arr. Nagasaki Airport							

【1日目】

10月9日（月）

午前にはパナマ到着。

午後に JICA 事務所訪問、金川誠 JICA パナマ所長、内藤文弥所員（JICA パナマ）、久野佐智子企画調査員（JICA エルサルバドル）、境智代所員（JICA 社会基盤部）から今回のスケジュールなどの確認、プロジェクト事業内容の説明を受け、内容についての協議を行った。

その後、在パナマ日本大使館を訪問し、福島秀夫大使へのご挨拶と歓談を行った（金川所長、内藤所員、福永浩仁在パナマ日本大使館二等書記官も同席）。今回の渡航の背景、講演内容の薬剤耐性の状況、感染症の世界の動向、中南米の動向などのテーマで意見交換を行った。

【2日目】

10月10日（火）

午前にはゴルガス研究所の Dr. Juan Miguel Pascale, Director General (研究所所長、以下パスカル所長)、Dra. Maria Eugenia de Antinori (副所長) との面談を行い、今回の訪問のテーマに関する議論、および今後の JICA 支援とゴルガス研究所の関係性の方向性の議論や長崎大学との今後の関係性の議論を行った。パスカル所長からはそれ以外に進行中の内容として、中南米全域での HIV 薬剤耐性のゲノムサーベイランスシステムの構築で、ゴルガス研究所、メキシコの INER(国立呼吸器疾患研究所)の HIV 研究部門、米国 CDC、カナダの研究所、ブラジルの研究所などの会合があったことを情報提供頂いた。メキシコの INER の HIV 研究部門とは別途、田中が昨年より少し個人的な関係を同研究部門コーディネータの医師と持っており、興味もあるため、どのような進捗状況なのかを後日確認することとした。その後、ゴルガス研究所の研究施設の案内を受けた。昨年のビジットでも同施設の案内を受けたが、昨年の段階でまだ支援ラボの建設後の機器搬入が途中であった箇所が完成して非常に順調にラボ運営がなされている印象を受けた。ウイルス研究室と遺伝子解析研究室が隣接しており、熱帯ウイルス感染症のウイルス分離・培養、遺伝子検査（PCR、シーケンス）まで完結できる体制（その他にも細菌、抗酸菌、寄生虫などの研究室もあり）で、全国各地からの検体の受託を行い解析をするとともに、様々な国や施設との協同研究が進行していた。最近の新規の研究としては、生殖幹細胞を用いたジカウイルスの研究が進行中とのことであった。JICA のゲノムサーベイランス支援は新型コロナウイルスの診断支援が主目的であったが、現在はポストコロナとしてその手法を様々なウイルスへの診断への応用を進めていきたいというゴルガス研究所の方針を提示頂いた。また、下水サーベイランスをゴルガス研究所を中心に計画中とのことであった。

午後に第一回目の講演として human AMR (RAM humana) のテーマで講演を行った。紹介挨拶をゴルガス研究所のパスカル所長、JICA パナマの金川所長、在パナマ日本大使館の福島大使から頂いた。会場での聴講者は第三国研修参加の研修員に加えゴルガス研究所のパスカル所長、Dra. Maria Eugenia de Antinori (副所長)、Dr. Alexander A Martinez (ゲノム部長) を始め、各部門の研究者、隣接するサントトマス病院や社会保険病院の医療関係者、パナマ保健省、マスコミ関係者 (la Web DE LA SALUD)、などの約 60 名。同時に YouTube でのライブ中継もなされ、約 30 名が視聴した。約 1 時間の講演の後、質疑応答と歓談を 30 分で行い終了。講演内容はゴルガス研究所、JICA パナマの SNS でも発信された。以下リンク。

<https://www.facebook.com/jicapanama>

https://www.instagram.com/institutogorgas_oficial/?hl=ja

<https://youtu.be/1MOPqjV202c?si=PrsluKR7MBAndBo->

* ゴルガス研究所（パナマシティ）ラボ視察



* 1 回目の講演の様様



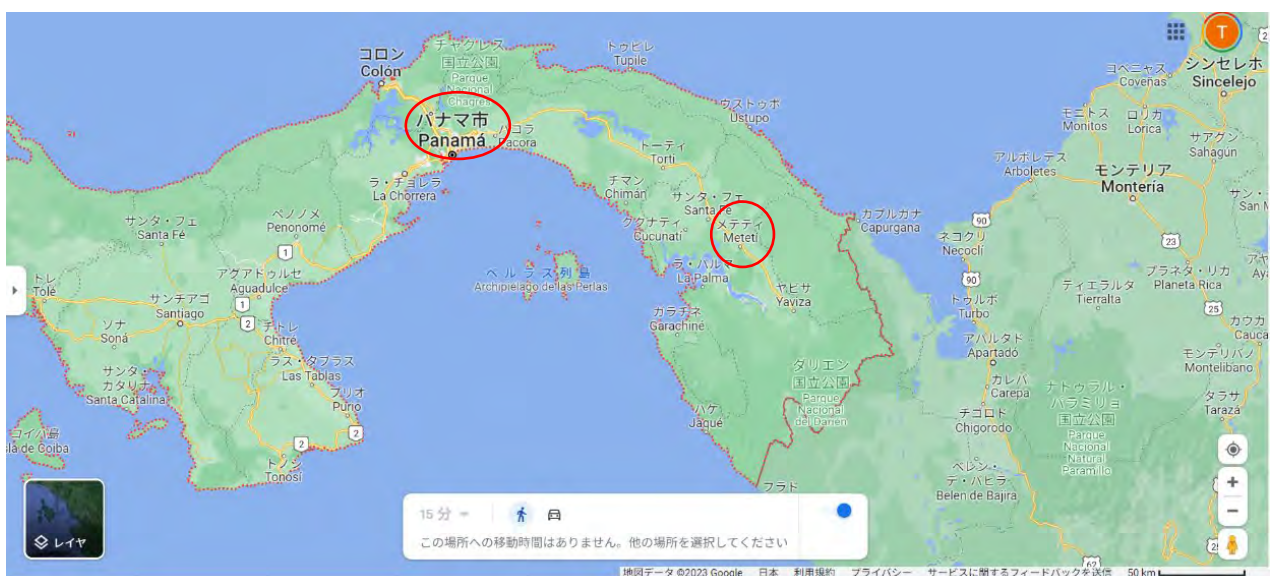
【3日目】

10月11日（水）

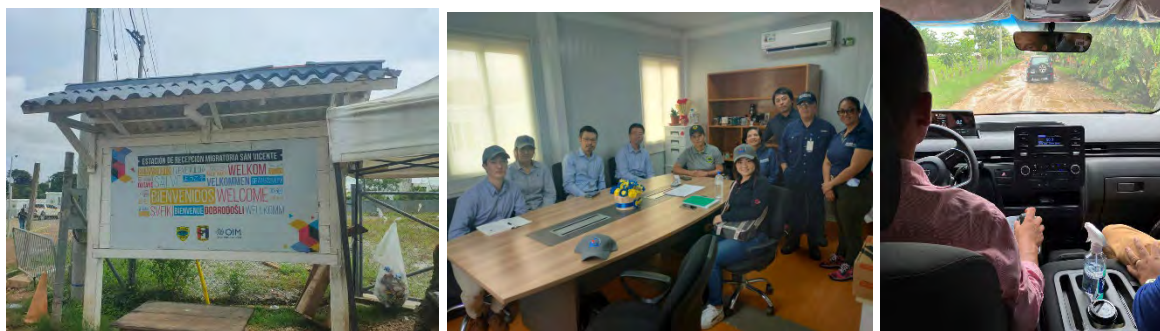
早朝に出発して（車で4時間半）コロンビアとの国境地域のダリエン県メテティにある移民受入センターの施設見学と同地域にあるゴルガス研究所ラボ（Branch）および現在計画中的ゴルガス研究所の診療所建設予定地の見学を行った。同行はゴルガス研究所側からパスカル所長、Dra. Maria Eugenia de Antinori（副所長）、ファティマ事務職員、日本側は田中、金川 JICA パナマ所長、内藤所員、久野企画調査員、境職員、ハビエル所員、福永日本大使二等書記官。同地域に入るためには事前に入国管理局に申請が必要で、同地域での3か所の警察の検問も受けた。以前からゴルガス研究所が国境警備隊への感染症診断支援での貢献もあるため、事前の申請や当日の視察が非常にスムーズであった。

不法移民難民一次収容所：

この地域に2か所ある受入センターのひとつ。南米からパナマに陸路で入国するには同県のジャングル地帯を通るルートが唯一である。ベネズエラの経済破綻で米国入国を目指すベネズエラ移民が主体であるが、今日伺った受入センターは中国人等アジア系の移民がかなり多かった。その背景には、エクアドルが中国人のビザ免除措置を取っているとのことで空路で中国からイスタンブール経由でエクアドルに入国し、コロンビアを経てそこから陸路でジャングルを超えてパナマに越境してきているとのことであった。今年1月からこれまでに30万人近くが入国しており、1日2千人のペースとのことで、移民局の現場担当管理官の説明を聞きながら、国境警備隊に警備されながら施設内見学を行った（施設内の写真撮影は禁止）。ユニセフ、赤十字、MSF（国境なき医師団）が入っていましたが、メンタルケアや妊婦ケアや初療対応だけがメインで重症者は施設外の病院に搬送されていた。最終的にこれらの移民は3日間の施設滞在期間を経て、政府が用意したバス（無料ではなく運賃は乗客負担）で隣国のコスタリカ国境まで送り届けられる（両国の大統領の協定のもと）。その後の中米他国がどのような方針で対応しているかは未確認だが、その他の様々な社会的背景の議論も現地視察で行われたが、今回の視察目的からやや逸脱するためここでは割愛する。



* 不法移民難民一次収容所



ダリエン県のゴルガス研究所ラボ：

上記のような背景があり、当然、熱帯感染症がしばしば発生している。保健省の診療所もあるが、検査体制が十分ではないため、ゴルガス研究所のラボで感染症診断の支援がなされており（同ラボにも JICA のゲノムサーベイランス支援の一環での機材供与がなされている）、パナマでは頻度が高くはない熱帯熱マラリアや重症脳炎などの患者もあり、死亡症例も経験しているとのことであった。同ラボでは首都のゴルガス研究所ラボまで検体送付の必要性がないように、マルチプレックス PCR での呼吸器パネル、腸管パネル、フィルムアレイでの呼吸器パネル、腸管パネル、重症者には特別に研究用の Global Fever Panel も使用され（熱性疾患のエボラなども含むほとんどの疾患をカバーできるキット）診断支援がなされていた。別途、保健省では黄熱病ワクチンも含め、必要なすべてのワクチン接種が行われていた。同ラボでの米国のラボとのコラボも進行しているとのことであったが、ゴルガス所長からも将来的な日本との連携も今後テーマが見つければよいとのことであった。この件に関しては引き続き今後の要課題である。他国からの人の流動が激しい状況のこの地域での新興感染症・再興感染症の発生リスクは非常に高いと考えられ、同研究所の診断支援は引き続き非常に重要であると再認識した。



ゴルガス研究所の医療施設建設予定地：

同地域には診断はされても医療的な治療を受ける施設の不足、もしくは診断自体が難しい状況がある（たとえば放射線診断機器がないため、骨折や肺炎などの画像診断も不可）、遠方への搬送が必要な状況も多々発生している。そのような背景もあり、同研究所はラボの近くに土地を購入して、医療施設の建設が予定されている。同施設では感染症以外にも一般医療ケアとしてのエコーやレントゲンなどによる診断治療も可能な施設を検討されている。建設予算の一部は確保されているようであったが、まだ予算確保がすべて完了している状況ではないとのことであった。当然、現在のラボでの支援や診療所の役割としては、移民以外にも地域住民への支援も対象である。



【4日目】

10月12日（木）

午前には JICA 事務所にて、今後の JICA パナマのゴルガス研究所への支援内容についての意見交換を行った（内藤所員、久野企画調査員、境職員）。内容は割愛。

午後は 2 コマ目の講演（One Health(Una Salud)）を行った。1 回目と同様にゴルガス研究所職員、および医療関係者、保健省、農牧開発省職員の聴講（約 50 名）、YouTube でのライブ配信（約 20 名が視聴）がなされた。講演後の質疑応答でも zoonosis への質問が多々あり、同研究所の研究者との継続的なやり取りを模索することについての意見交換を行った。講演内容はゴルガス研究所、JICA パナマの SNS でも発信された。以下リンク。

講演終了後の同日夕方の便で米国経由で帰国した。

<https://www.facebook.com/jicapanama>

https://www.instagram.com/institutogorgas_oficial/?hl=ja

<https://www.youtube.com/live/sj2m61nIk4o?si=wAWnEp9697EBtnzs>

2 回目の講演



【まとめ】

昨年のパナマの訪問が 1 日だけの滞在であったため、前回視察できなかったリクエストも今回は実現した。今回も 3 泊 4 日の短い滞在であったが、非常に濃密なスケジュールでパナマを中心とした中米地域の医療を中心とした保健衛生の状況に関して学びが多い出張であった。JICA パナマとゴルガス研究所の関係が非常に良好で、パスカル所長を始め、主要スタッフも協議案件に対して非常に受け入れが良く、今後 JICA の枠組みが進んでいくなかで、その枠組み以外での長崎大学との関係性構築に非常に積極的な意見も多かったため、少しずつ小さな関係から構築を模索していきたい。

【謝辞】

今回、このような機会を作って依頼を頂き、セットアップにご尽力いただいた、JICA パナマ事務所の金川所長、内藤様をはじめ現地事務所スタッフの皆さま、JICA 本部（東京）の皆さま、出張期間の病院業務も含めた様々な業務のバックアップを頂いた泉川公一先生、古本朗嗣先生、柿内聡志先生をはじめ感染制御教育センター・感染症医療人育成センターのスタッフの皆さま、今回の渡航、および今後の方向性への助言を頂いた熱帯医学・グローバルヘルス研究科の北潔先生に感謝申し上げます。